
とある銃士の物語

SMACK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある銃士の物語

【Nコード】

N1788T

【作者名】

SMACK

【あらすじ】

五感擬似体験型ゲーム、所謂VRゲームのファーストタイトル発表から10年。幾つものVRゲームが発表される中、そのゲーム『シルファートオンライン』は発表された。丁度今やっているオンラインゲームに飽きてきた俺、藤宮来栖ふじみやくるすはシルファートオンラインのソフトを購入し、仮想世界へとダイブする。それは同時にその世界への幽閉を意味していた。「この世界は遊び尽くされるまでログアウトを不可能とします。」神の言葉にも等しきシステムアナウンスから、10万人のプレイヤー達による大攻略がスタートした。

テンプレ設定、御都合主義にご注意下さい。 紅綾さんの小説
『遊びつくせ、世界の全てを』の二次小説になります。

1 プロローグ（前書き）

紅綾さんの小説『遊びつくせ、世界の全てを』の二次小説になります。執筆の許可をくれた紅綾さんに感謝です。

また、作者は初心者な為、非常に拙い作品です。それでも読みた
い方だけお進み下さい。

1 プロローグ

『シルフアートオンライン』。

そのVRMMOを知ったのは夜中の二ユースだった。何でもアバターの見た目変動する『CHR値』なる物を導入した、真新しいシステムなんだとか。

ゲームの評論家からは賛否両論出ているが、俺、ふじみやくるす藤宮来栖の興味を惹き付けるには十分だった。幾つものVRゲームをやり尽くし、丁度他のゲームに興味を惹かれる時期だったのも大きい。

早速ネット上に溢れているシルフアートオンラインの情報を集めまくった。

情報を整理すると、新システムであるCHR値以外は至って普通のVRMMOだが、このCHR値なる物はプレイヤーだけに留まらず、建物やNPC、果てはモンスターにまで作用されるそうだ。よりリアルな世界を追求した結果がCHR値の導入に踏み切ったらしい。

ネット上にはオープン参加者の書き込みもいくつか載っており、曰く、『リアルよりもリアルな世界』らしく、どの参加者も太鼓判を押すゲームのようだった。

「買いだな。」

次にプレイするゲームをシルフアートオンラインに決めた俺は、早速近所のゲームショップにて先行予約を取った。予約の半券に記

載された番号は23。つまり既にこの町だけでも22人の人間がシルファートオンラインの購入に踏み切っている事になる。予約者は発売日には更に増えているだろうし、予約を入れずに買いに来る客も大勢いるはずだ。初回生産は10万本とあったが、恐らく初日で完売するだろう。そうなると先行予約を入れておいて間違いは無いはずだ。

期待に胸を膨らませ、発売当日を待った。

発売日当日。

予約は入れたのだから早朝から開店を待つ必要は無かったが、新しく期待しているゲームという事もあり、確実にソフトを購入する為に俺は開店前のゲームショップに来ていた。まだまだ開店には1時間あるが、ショップには既に長蛇の列が出来ている。やはり良くも悪くも話題になるだけの事はある。

「シルファートオンラインをご予約のお客様はこちらへお並び下さい！」

店員が拡声器を使って指示を出している。列に並んでいる予約をしていない人だかりには整理券を配っている。予約者は優先的に買

えるようだ。やっぱり予約しといて正解だったか。

予約者の列に並びながらケータイで公式サイトと攻略サイトを巡回し、新たな情報を探していく。充電は90%以上残っている。暫くはこれで時間が過ぎるのを待った。

10時になった。

ゲームショップのシャッターが上がり、列を作っていた人ばかりが一気にショップの中へと流れ込む。俺も負けじとショップに入る。カウンターが2つ設けられているが、既にカウンターからの列も出来始めていた。

「シルファートオンラインを先行予約のお客様はこちらへどうぞ！」

予約の半券を手に呼ばれたカウンターへと並ぶ。代金と引換にシルファートオンラインのソフトを手渡される。予約者専用のカウンターでは、1人、また1人と捌けていき、俺の番になった。半券を提示し代金を支払う。するとシルファートオンラインのソフトを手渡された。シルファートオンライン、ゲットだ。

そのまま帰っても良かったが、小腹が空いた俺は近所のファーストフード店へと向かった。

少し早めの昼飯、テリヤキバーガーを食べながら、取説を読んでいく。ログイン可能時間は発売日の午後7時から。つまり今日か。

「何々、必ず7時から8時までの間にログインして下さい、って、何かイベントでもあったっけ？」

公式サイトにそんな告知は無かったはずだ。しかし何にせよ、7時には必ずログインするだろうと考えるとそのページは読み飛ばした。恐らく 組もそうするだろうし、スタートダッシュの波には乗らないとだ。

「それまでは情報収集か。」

テリヤキバーガーを食べながら、公式サイトと攻略サイトの両方をチェックする。目新しい情報は無いようだ。

「収穫は無しか。」

オレンジジュースを飲み干し、ポテトの最後をかつ食らいトレイを片付ける。

昼飯を終えるとアパートへと帰るだけだ。ログイン可能まであと8時間弱あるが、公式サイトと攻略サイト巡りして晩飯と風呂を済ませば時間は足りるだろう。

「楽しくなってきた！」

『リアルよりもリアルな世界』が謳い文句のゲームなのだ。楽しみだ。

2 ログインの罠

風呂を済ませ時刻は午後6時半を回った所。ログイン可能まであと30分を切った。もう一度攻略サイトにて情報の漏れは無いか確認する。

ふむ、まだ新しい情報のアップは無いか。

後はVRハード機のヘッドギアを被り、時が来るのを待つだけだ。

5、4、3、2、1、0。

ピピピッとケータイのアラームが午後7時を告げる。と同時に、俺はシルファートオンラインの世界へとダイブした。最近のハードのCPUはかなり高度化している。10万人の同時ログインくらい何とかなるだろう。

真っ暗な闇の中で俺の意識だけが浮かんでいる状態が続く。ポーンと音が鳴り、目の前に鏡のような物が現れた。そこに写っているのはマネキンのようなのっぺりとした人形。つまり今の俺って事か。

「アバターの容姿を決めます。ランダムをご希望の場合は『ランダム』を、そうでない場合は『エディット』を選択し、各パーツを設定して下さい。」

VRゲームは声に出して唱えるか脳波を使って行動するかによる。VRゲームに慣れている俺は脳波を使ってエディットを選択した。

「うわ、こんなにあるのか……」

第1の感想は容姿選択の多さにだった。

流石リアルを追求したゲームだけあり、目、鼻、口は勿論、髪の毛や髭、身長、果ては声まで選択出来るようだ。

幾千ものパーツの中から現実の自分に近いものを選んでいく。徐々に鏡に写るマネキンが、納得のいく仕上がりになっていった。最後に声と名前を選択し、アバター作成は完了した。

「続いて武器の選択に入ります。お好みの武器を選択して下さい。」

再度システムアナウンスが流れる。武器の選択か。これは迷う所だ。通常の剣を1つ取ってみても、大剣から片手剣、小剣と幅広く選べるようになってる。更にメイスや弓矢、銃といった変わり種の武器まで存在する。

「……2丁拳銃、つてのもアリかな？」

自慢じゃないが、俺はシューティングゲームには結構自信がある。それがこのゲームでもそれが出来ればそこそこイケるだろう。

「武器を決定致しました。」

おおう、アリだったか。ナイス俺！

「続いて幾つかの質問に答えていただきます。好きな色は何でしょうか？」

目の前にあつた鏡が消え、続いて様々な色をしたブロックが浮かんでは消えていく。赤や青、緑に黄色。こんなもん千差万別だろ。それこそプレイヤーの数だけ答えがあるかも知れない。それにも応じるのか。やるな運営陣！

「ん〜……黒で。」

金色と答えてみたい気もしたが、折角作ったアバターが百？になつてしまう事を予想してしまい、無難な色を選択した。

「続いたの質問です。」

この後も幾つかの質問に答えていき、漸くキャラが決まったようだ。

「アバターのスキルとステータスが決定致しました。」

目の前に再び鏡が現れる。そこに写っていた俺のキャラは何処と無く現実味を帯びた感じがした。

「アバターのステータスが決まったって事は、CHR値も決まったのか？」

それならアバターのリアルさにも説明がつく。取り敢えず俺はメニュー画面を開くように念じてみた。するとデフォルメされた俺の姿をトップに、メニュー画面は開かれた。『装備品』に始まり『ステータス』、『スキル』、『フレンド』等々、色々なアイコンが並んでいた。

俺は迷わずにステータスを確認する。

『CHR値：10』

色々なステータスが並ぶ中、一番下にそれはあった。これが今の俺のCHR値。まあまだレベルは1だしこんなもんだろ。これが上昇していけば、よりリアルな世界を楽しめる訳だ。

「全プレイヤーがログインするまでもう少々お待ち下さい。その間にCHR値のご説明は必要でしょうか？」

「お願いします。」

「畏まりました。鏡をご覧ください。アバターにおけるCHR値の上昇をご覧ください。」

目の前の鏡を見る。すると、みるみる内に俺のアバターは魅力的になっていった。外見的な物はそう変わらない。だが何と云うか、オーラのような物があって、それが強まった感じた。

「これがアバターにおけるCHR値の上昇です。CHR値を元に戻します。」

アバターが元のレベル1の状態に戻る。ナルシストじゃないが、もうちょっとだけカッコいい自分の姿を見ていたかったな。

だがこれは分かりやすい。CHR値が上昇すれば魅力度も増すのか。カリスマ値と言われるだけあるな。

「また、CHR値にはこんな効果もございます。」

鏡が消え目の前にはファンタジーの王道モンスター、ドラゴンが現れた。

「CHR値を上昇させます。」

見る間にドラゴンは鮮明さを増し、今にも飛び掛かって来そうな

迫力になった。思わず腰の銃に手が伸びてしまう程に。

「CHR値にはこんな方向性もございます。」

今度はどんな迫力になるのかと期待していると、目の前のドラゴンは何と言いか可愛らしい印象になった。見た目が変わった訳でも無いのに、目の前のドラゴンからは小動物のような印象を受ける。これは何もドラゴンで試す事はないだろう。若干不気味だ。

「以上がCHR値の説明になります。ご理解頂けたでしょうか？」

十分過ぎる程に分かりやすかったよ。やるな運営陣。

「それでは全プレイヤーがログインするまで少々お待ち下さい。」

さて、ゲームが始まる前に確認する事はしておこう。まずは装備品の確認だ。俺が初期装備として持っている物は『ビギナーズ・マツチロックガン』という物らしい。それが左右の腰に1丁ずつ。服装は遠距離支援型のもので『布の服』の上下、所謂チュニックとズボンだ。

スキルは5つあるスロットが既に2つ埋まっている。『炸裂弾』と『ホーリーライト』。炸裂弾はそのまま炸裂する弾丸が撃てるのだろう。ホーリーライトはHPを回復してくれるそうだ。これは便利だ。HP回復と共にスキルも上達する。HPポーションの節約に

もなる。初期のスキルが便利なスキルで良かった。

「……全プレイヤーのログインを確認致しました。これよりシルフアートオンラインの舞台へと転送致します。」

お、漸く始まるのか。ちょっとドキドキしてきた。

「尚、ゲームの変更点をお伝えします。この世界は、遊びつくされるまでログアウトを不可能とします。」

……へ？

「遊びつくすといっても、単純に遊べばいいというわけではありません。具体的には全実績の達成を指します。何も全てを1人でクリアしなければならぬということではありません。誰かがクリアした実績は、全プレイヤーがクリアしたこととなります。」

何だか嫌な予感がするんだが……

「なお、外部からゲーム機を外し強制ログアウトさせることは可能です。ですが、その方法はあまり推奨いたしません。このゲームにはクイックタイムシステムが搭載されております。このゲームにおけるクイックタイムシステムの最大倍率は200万倍です。現実の

「1分はこちらでの約4年になります。」

クイックタイムシステム、これは少し厄介な物が導入されてるな。ログインしたのが夕食を食べて午後7時。独り暮らしの俺はプレイを強制的に終了してくれる人は存在しない。つまり、ログアウト出来るのはゲームのクリア以外に選択肢は無いつて事が。

「ゲーム内で死亡した場合のデスペナルティーにも変更点がございます。死亡した場合、スキルの熟練度、及び取得経験値の減少。所持アイテムの一部をドロップ、そして1週間の行動不能となります。死亡したプレイヤーは保留エリアに移動し、そのまま1週間をそこで待機していただきます。」

次々に入ってくる新しい情報を整理していく。

つまり俺はこのゲーム、『シルファートオンライン』の世界に軟禁されたのか？

「これより、全プレイヤーをスタート地点であるマップに移動させます。そのままお待ちください。」

無情にも目の前に『Now Loading』と文字が浮かび上がる。これから数年間、いや数十年かかるであろうゲームの世界に導かれるのだ。どうしたらいいやら……

『GAMES START』に文字は変わり、俺はプレイヤーが必ず最初に訪れる町、『プロトス』に到着した。先ず最初にしなきゃいけない事は情報の収集である。

運営にギヤーギヤー文句を言いながら騒いでいるプレイヤー達から離れ、静かな場所でログアウトが出来ないかどうか試してみる。

メニュー画面を開いてログアウトボタンをクリックする。すると足元に魔法陣が浮かび上がり光を発し出した。

お、これはイケるんじゃないか？と思った瞬間、魔法陣はパリンと音を立てて砕け散った。やっぱりログアウトは無理のようだ。GMコールも通じない。

「厄介な事になったな……」

未だ文句ばかり垂れながら騒いでいる面子を他所に、俺は状況把握に励んだ。

ログアウト出来ないのはさっき身をもって体験した。ならばこれから成すべき事は何か。

「……ゲームクリアを目指すしかない、か。」

勿論1人で出来る事は限られている。だが、真面目にゲームクリアを目指してプレイする事は重要だろう。廃人とまでは行かないが、これでも幾つかのゲームを渡り歩いて来たんだ。この状況下でもそれなりにゲームを楽しむのも一興か。

そうと決まったらやるべき事は決まっている。メニューウィンドウを開き『クエスト』の一覧を表示させた。

「ふむ。まずはチュートリアルクエストからだな。」

ゲームのシステムを覚える為の1番最初のクエストは『HP・MPポーションの購入』だった。

アイコンをクリックすると頭上に矢印が現れる。これがポーションを売っているNPCまで誘導してくれるのか。至れり尽くせりだな。

矢印に従って歩いていくと、1軒のショップへと辿り着いた。ふむ、此処がアイテムショップか。

中に入ると病院のような薬品の匂いが漂っていた。

「いらっしやいませ。本日はどういったご用件でしょうか？」

「売り物の一覧を見せて？」

「畏まりました。」

目の前にウィンドウが開かれる。初期の所持金でも買える値段でそれは売られていた。

「HPポジションを2つ、MPポジションを8つ下さい。」

「畏まりました。」

同時に開いていた自分のステータス画面から所持金が引かれ、イベントリに各ポジションが入った。すると『クエスト達成』の文字が浮かび上がった。クエスト画面を開くと『報酬』と出ていたので迷わずクリックする。僅かばかりの経験値と報酬金が手に入った。ふむ、ここら辺は他のVRMMOと対して変わりは無いな。これならどんどんクエストをこなして行けそうだ。

次のクエストは町の長老からの手紙を武器屋に持っていくという所謂使いクエストだ。頭上に浮かび上がった矢印に従い、長老のいる場所へ向かい、手紙を受け取り武器屋に届ける。すると今度は武器屋から防具屋へと手紙を渡すクエストが発生した。

ふむ、これは町の要所を覚える為のクエストなんだろう。僅かな経験値と報酬金を手に入れながらチュートリアルクエストを進行させていった。

町にある池で釣りをしたり、釣った魚を焼いたり等、様々なチュートリアルクエストを達成したお陰か、町の何処に何があるのかは大体把握出来るようになった。

また、チュートリアルクエストを幾つか達成した所でレベルが1つ上がった。

シルファートオンラインではレベルが1上昇するとHPとMPに振り分けられるポイントがレベル毎に、またSTR値等のステータ

スに振り分けられるポイントが10ポイント獲得出来る。シルファ
ートオンラインのレベル上限は250、スキルの熟練度は最大で1
000、各ステータスは999でカンストだったはずだ。俺はHP
とMPに取り敢えず100ずつ振り分け、ステータスの方はSTR
に少し、残りをINTとAGIに均等に振り分けた。

次はフィールドに出てみるか。

残りのクエストは実際にフィールドに出ないと達成出来ないクエ
ストばかりになった。戦闘系クエストもある。いきなり強力なモン
スターと遭遇する事は無いと思うが、精々デスペナを食らわないよ
う頑張ろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1788t/>

とある銃士の物語

2011年10月6日14時01分発行